

ジム・ケイシャン
Jim Kacian (1953-)
 ——ハイクの短さを追求

英語ハイクのリーダー的役割を担う出版社、Red Moon Press (レッドムーンプレス) の代表を務めるジム・ケイシャンは、アメリカハイク協会機関誌 *Frog Pond* の編集長、また世界ハイク協会 (WHA) の創設メンバーでもあり、南西ヨーロッパハイク選集 *KNOTS* (『結び目』) の共編者でもあります。詩人であるとともに、プロのテニスプレーヤー、音楽演奏家、デザイナーなど多芸な人で、現在バージニア州ペリービルに暮らしています。

カリフォルニア在住のハイク詩人、エバ・ストーリー (Ebba Story) が「ジムのハイクは短くて簡潔、そしてリズムと音を感じさせる、広範な空間意識に満ちている」(*Presents of Mind*, 1996) と述べていますが、ハイクの短さを常に追求している詩人です。身体運動と芸術活動のすべてのエッセンスがハイクに生かされ、短さを追求し、省略することにさまざまな工夫が見られるハイクを創作しています。1996年に出版された彼の第一句集は、その工夫やアイデアの宝庫であり、彼の芸術的センスが買が埋めつくされています。

*New Year's dawn
 light first gathers
 in the icicles*

(*Presents of Mind*, Katsura Press, 1996)

新年の夜明け
 初日あつむる
 つららかな (吉村訳)

*moonless night
 the dark path lit
 by glowworms*

(同上)

闇夜
 夜道を照らす
 フナボタル (吉村訳)

*harvest moon
 the thud of falling apples
 in the night*

(同上)

収穫月
 リンゴの落ちる音
 真夜中に (吉村訳)

*the snake
 and the grass
 are one*

(*Six Directions*, La Alameda Press, 1997)

蛇と
 草
 一つとなり (吉村訳)

英語ハイクでは、3行17音節もしくは17音節以内で書くことが、一応原則として決められています。実際に17音節で書こうとすると、かなり長い英語になってしまいます。ジムのハイクはその短さに特徴があります。